

奈良県南部東部振興課御中

「スローライフ・フォーラム in 十津川」報告書

特定非営利活動法人スローライフ・ジャパン

■目次

1 業務概要

2 開催内容

1) 分科会

2) 視察見学

3) フォーラム

3 おわりに

4 資料

- ・案内チラシ現地用・学会用
- ・当日プログラム

1 業務概要

1) 業務名

スローライフ・フォーラム実施業務

2) 目的

奥大和地域の住民や移住者が、持続可能なスローライフ生活の価値を再認識するとともに、地域外の方に対して、スローライフにより生活の質を高めようとする考え方を広め、関係人口の増加を図る。

3) 業務内容

「スローライフ」の考え方の視点から地域のあり方を考えるフォーラムを開催する。地域住民と意見交換会を開催し、地域の実情を研究した上で、フォーラムにおいて有識者による基調講演や、意見交換会の代表者による発表、知事や村長等をパネリストとしたシンポジウムを開催する。

【名称】

スローライフ・フォーラム in 十津川

【開催場所】

十津川村民ひろば（奈良県吉野郡十津川村大字折立 285）他

【開催期間】

令和3年11月4日（木）～11月21日（日）

【内容】

①意見交換会（分科会） 11月4日（木）・5日（金）
村全体を視野に入れ、地域住民等と子育てや高齢化等、観光振興・産業振興等をテーマに意見交換会を開催する。

②地域研究（視察） 11月20日（土）
地域の実情に即した課題解決のため、現地学習・研究等を実施する。

③フォーラム 11月21日（日）
十津川村民ひろば（十津川村折立）で、「スローライフ」の考え方を広く県民に押し広めるためのフォーラムを開催する。

【留意点】

意見交換会、フォーラムの開催に際しては、新型コロナウイルス感染症対策を徹底することとし、「奈良県緊急対処措置」等を参考として、必要な対策を講じる。

2 開催内容

1) 分科会（意見交換会）

- ・当初、2回の分科会をテーマごとに開催する予定だったが、村民同士の話し合いを活発にするため、同時に2つのテーマ「多様な暮らし」「観光を多彩に」について、2回の分科会を開催した。
- ・また、村民座長は指定せずに進行し、分科会報告する代表者は、フォーラム当日の出席者に合わせて選出した。
- ・2回の分科会で延べ27人が参加し、オンラインでフォーラム時のパネリストが視聴した。
- ・分科会アドバイザーとして、室崎千重（奈良女子大学准教授）と野口智子（NPO スローライフ・ジャパン副理事長、ゆとり研究所）が参加した。

■分科会 I 「多様な暮らし」「観光を多彩に」

■日時：11月4日（木）19：00～21：00

■会場：十津川村役場会議室

■参加者：村内9名・村外6名・オンライン村外5名・アドバイザー2名

【自己紹介】

——村内——

- ・地域おこし協力隊。インバウンドの仕組み作りをしている。十津川村に来て2年。ここでの暮らしを实践したいと思ったので、今、暮らしの学び中。
- ・「空中の村」（アウトドア施設）を作り運営している。林業がやりたくて地域おこし協力隊で村に来た。村に来て5年。
- ・高校まで村に居て、44年間離れていた。父は林業、自分は今、農業。トライアスロン日本一の経験がある。
- ・今年3月、村役場を定年退職。今は介護しながら野良工作中。十津川大好き。「ムコダマシ」（在来種の餅粟）を持参。十津川村は米がとれなかった。この粟は白いので、婿さんを米だとだませるからこの名がある。今再び作られ始めている。



- ・ 谷瀬の特産として、純米酒「谷瀬」「ゆうべし」高菜漬けを作っている。(持参) 今年から第4の特産品としてのサツマイモの干し芋等に取り組んでいる。
- ・ 55 の字のうち、人が住んでいない集落もある。熊野古道なので他所の人は通るが。里芋(ヤツガシラ)で焼酎を作っている。
- ・ 結婚を機に村へ。中学・小学生の母。林業事務所に勤務しながら、村の豊かな自然を活かした森林環境教育に取り組んでいる。葉っぱの魚・マツボックリを釣り道具に見立てた玩具を使って子どもたちに山に親しんでもらっている。(持参)
- ・ デザイナー。地域の子どものデザインを教えている法人を起業。渋谷のIT企業でアプリやWEBサービス等。外国人ガイドも。外国人と地域の魅力を発見するプロジェクトで来村。その後も残った理由は、PCさえあればどこでも働けるので、自分の生き方や働き方をデザインできる実証がしたいから。
- ・ 神納川で地域おこし。建設業・椎茸栽培。趣味は釣りや村でできる遊びを。

——村外——

・ 和歌山県紀の川市から。昨年より「道の駅青洲の里」駅長。もと、市役所農林商工部長。谷瀬との関わりもある。「空中の村」に行つて今もふわふわしている。

・ 静岡県掛川市から。市民活動で「栗焼酎」を作っている。洋品店。前日、谷瀬の寄り合いに参加、「自主自立」の現場にふれて感心した。

・ 県職員。奈良県立万葉文化館副館長。30年前、過疎対策の担当だったので十津川には週一回通っていた。明治の大水害の逸話を意識しながら。人口4500~600人の頃。定住人口を増やすのは難しいと考え「交流人口」に目を向けていた。今日は早く着いて以前よりよく知る温泉に浸かってきた。

・ 和歌山県紀の川市観光振興課11年目。年中フルーツがとれるのを観光資源と考えDMOに取り組んでいる。子連れで「ゆっくり散歩道」にも来ている。

・ 日本の文化を楽しく遊ぼうと「心葉」を主宰。歳時記、仏教美術を主に教えている。



・ 埼玉県越谷市より「スローライフ旬の店」で叔母の作った藍染めを売っている。父親の会社を継ぎ、PCやテレビの電子部品を作る工場を経営している。来年50周年、息子に承継させる準備をしている。





【暮らしについて】

・食文化が好き。自分は東北（仙台）出身、大学から東京・横浜・アメリカを来回する生活を16年。在来種の「ムコダマシ」や「十津川高菜」が残っているのがすごい。この村は「暮らし」そのものもが素敵。声掛け、野菜のやり取りなど、人にやさしい暮らしを自分も実践したい。日本らしい「ゆい」の文化

を遺していきたい。

・都会より人が少ないのに都会より繋がりや交流が出来る。道普請や畑仕事で。人の交流と自然がいっぱいあるからビジネスの可能性を感じる。都会では何でも一人でやらなくてはならないが、ここは人の力を借りて一緒に歩いていく。

・「自然が豊か、和む」と村外の人が感想を。気候・夜空が綺麗・自然は自慢。本流が濁るのは残念だが。十津川駅伝があるのも自慢。戦後から66回開催した。村中が参加、北から南、翌年は南から北へと走る独特のルール。伴走もある。40チームが参加。村の大きな手作りイベントだ。

・日本一大きな村ということは日本一の自然があるということ。司馬遼太郎さんが「秘境」だといったとおり。世界遺産もある。川もある。急峻な地形での暮らしは大変で畑を作るのも難しい。あの石垣をどうやって作ったのか先人に敬意をもつ。家を新築する際に、祖母が2年掛りで田んぼにした苦勞の歴史を知って、そこには建てなかった。

・サツマイモ掘りのイベントで子ども達の声がいいな～と感じた。谷瀬は4歳以下の子どもが7人、もうすぐ2人増える。子どもたちが増えた理由は、外からの人を受け入れたからと思う。「ゆっくり散歩道」を作り、花を植え、「展望台」も集落の人で整備した。Iターンは5軒ある。

・この村には「あげる」文化がある。これを絶やさない様にしたい。自分は大根や白菜を50人の友人に毎年贈るために作っている。逆にもらう事も。急峻地ではできない“ハコイ”（ほくほくした）ヤツガシラ（里芋）で焼酎を作っている。

・森林浴のイベントでママたちが自然を介して繋がる。5歳児が1700mの山を登った。村の子は案外普通なので、この子どもは足腰強いと思う。

・朝から真夜中まで仕事をしているので、自分の辛さを発散してリフレッシュできる場所が近くにあるのがいい。「空中の村」や、昼ごはんの後の温泉でひとつ風呂など。カヤックを購入したので瀬峡なども。夜空の



綺麗さを知ってから今まで見えてなかったものに気づけた。近所さんが週2回位夕食を作ってくれる。日々感謝。今年は梅を100kg収穫して梅酒を作った。手作りした物を他県の友人に送るのが嬉しい。自分が変わっていく実感がある。

・大阪で4年の大学生生活を送った。ここの自然や心意気、やさしさ、空気感を知り、伝えていきたい。ここには作られていない良さがある。そして無ければ作る。弁当に箸が入ってないときは枝で作る。それが当たり前だ。

【観光について】

・国内外に、ここの「暮らし」とその文化を伝えたい。見るだけでなく、暮らしを感じてもらいたい。神納川の農家民宿などはやっている人の高齢化が課題。次はどうするか。村には空白の世代があると思う。



・ここの特徴は村民との交流ができること。「自然」よりは「健康」「体づくり」の言葉を使ってアピールするとい。日本人は自然を無料で遊べると思っている。自然は整備し維持にはお金がかかる、その認識が薄い。「自然は好きだが、虫は嫌、汚れたくない」は都合が良すぎないか。

・よその人は体力を使って心の癒しになる。農家民宿や週末の滞在・農業体験・地元のサポートなど、関係の組み合わせが農地の維持に繋がればと思う。

・「健康」を前面に出すアプローチを。温泉の効能は還元力。「健康寿命」につながる。癌に効くというエビデンスもある。もっと効果効能を謳って県とタイアップして「心身再生の里づくり」をしよう。十津川では当たり前の「源泉かけ流し」も、村外では貴重なこと。また花からのアプローチも。開花時期は短い、天然の「キイジョウロホトトギス」がある。調査している人もいる。天然記念物指定を受けるのは良し悪しだが。

・村での作業分、働いた対価や報酬がその人に得られるようにしたい。まだまだボランティアが多いのが課題。

・天然の「バイカオウレン」、杉林の中にある珍しい花が増えてきた。ずっと植え続けてきた。1月の終わりからひと月間位に咲く。杉の枯れ枝を掃うのは大変だが、ネットの情報で300人位が見に来た。遠くは石川県や神戸から、6回目という人も。そういう観光もある。

・自然を活かした観光が都市部の人にウケるのでは？

・観光の定義って何だろう。何かを見る？コンテンツ？名所？…総合的に魅力を伝えるにはコンセプトが必要だと思う。勉強の為に島根県隠岐に行った。『無いものはない』をテーマにしている。なるほど、暖かい人が居れば十分だ。滞在し

た宿泊施設も移住者が多く、働く場があり、村民の誰もが村の魅力を伝えられる。そのチーム力がすごかった。十津川もそうになりたい。



・様々な協力を得て着地型の林間学校や農家民泊を 11 軒でやった。高齢化やおもてなしの難しさで、今や 2 軒になった。「〇〇体験」を商品化したことへの疑問があり、今は「〇〇さんに任せる体験」にしたら…と思う。山をつかった遊びでも、その時の条件に合わせた体験メニューが作れる。

・村は地域資源を活用するのが上手だと思った。松茸のピザや朴葉をアルミの代わりに敷いた焼き方など。資源＝人だと思う。人の発掘やネットワークや絆を深めたらと思う。「谷瀬のつり橋」や「空中の村」で感じた“ふわふわ”を「ふわふわツーリズム」にしたら。

・ナツメが美味しいし、こげ茶色の枯れ葉が来訪者には新鮮。日頃は暮らしやすさや便利な所にいるが、果たしてそれが人間にとって豊かなのか考えさせられた。皆さんの様に逞しく生きれば本来持っている人間力が引き出せると感じた。掛川の地元民が組み立てるガイドサイクリングも参考になれば。

・30 年前と比較して道が良くなり近くなった実感。インターネットとドクターヘリが必需で必然となった。そこでコミュニティーにどっぷり入って味わう観光や、暮らしが羨ましい。基礎的な暮らしと新しい人を受け入れることを両輪で考える必要があると感じた。



・20 年前に妻とデートした谷瀬のつり橋は、何よりの地域資源だと思う。「空中の村」でふわふわ、山・樹木の神秘性と自然の恐ろしさも感じられる。厳しい自然とその中で暮らしている優しい人の心も地域資源。他所からお金をもらって盛り上げるのが観光？交流でウインウインの観光もあるはずだ。人の良さや個性を前面に出す観光の意見に賛成。

・“村内”の枠の中にも、元は外からの人が多い事に感動した。コロナ禍で“満足”について考える機会が多かったが、自然にも人にも“感謝”があり、感謝が深いから強さと優しさを私たちが感じた。作り出す、その道具からも作り出すことがすごい。品物・働き方・動き方…同じ人間としてたくさん考えることが出来た。

・村に入ってから、皆さんの一生懸命さをひしひしと感じた。心打たれたのは薪の風呂。申し訳ないという感情がでた。お顔や発言には気を張らず飾らない雰囲気があり、それが私たちには心地よかった。

【アドバイザーから】

8年間通っている。学生を受け入れてくれる。決めたことを実現する力がすごい。皆で力を合わせてやる技術がある。買うのが当たり前の物を作ること、技を知った。生きる幸せって…と考えさせられる。学生も観光に求めるものは変わってきている。見て確認するだけの旅行より、そこで何ができる、どんな人に会える？の意識。村の人と交流したい、話が楽しい。うまく話せなくても、暮らしの中のちょっとした会話が次につながる。どう伝えるかの工夫が出来ると良いと感じた。外の人をうまく使っていく。接待だけでなく、体験と共に“お手伝い要員”にしていくことも大事だろう。



■分科会Ⅱ「多様な暮らし」「観光を多彩に」

■日時：11月5日（金）10：00～12：00

■会場：「道の駅十津川郷」

■参加者：村内7名・村外5名・オンライン村外2名・アドバイザー2名

【自己紹介】



—村内から—

・地域おこし協力隊として活動。パソコンとインターネットさえあれば仕事ができる環境が出来上がってきている中で、知らない土地にきてどんな仕事ができるのか？そんなときにコンシェルジュとしてアドバイスしたり、空いた時間に草木染など体験したり。観光業の派生を期待していきたい。環境整備をしてどん

なところを遺せるのかを準備していきたい。

・6年間山の仕事、その後役場で仕事。村で何かできないか？ということで「山の家」を経営。スローライフをもっと知りたくて参加した。

・4歳の息子、主婦、島根県雲南市出身、結婚で村へ。

・建築業、大工。「いこら」で週1回土曜日「ひだまりカフェ」11時半～15時。パスタや趣味で作った小道具



を販売。季節にあった山菜の天ぷら、鶏のから揚げ、お食事など。木のスプーンも作る。観光にもかかわっている、空き家のイノベーションもしている。

・生まれて中学までは十津川、高校は奈良、大学は名古屋、仕事1年で子どもを出産し帰ってきた。

・宿泊施設を運営している。元役場で40年勤務。53歳で退職、このままでは潰れるのではないかと何か役に立てないかとクレーンやダンプなども操作する。新十津川との交流も熱心にしている。

・民宿「杉の原」、ずっと十津川に生まれ育った、子ども2歳と4歳、祖父祖母と同居。コロナの影響もあり1日一組限定でやっている。毎日、お客さんを受けるとより単発で入れている。谷瀬でほかにお宿がなく、仕事で来村された方など、できる範囲で。

・中学まで十津川、結婚を機に帰ってきた。お勤めの気力はなくなり子どもを見ながらクッキーなどをつくる。「空中の村」などで販売。「いこら」で、コーヒー（十津川ブレンド）、クッキー・ケーキなどを販売。木曜日に。



—村外から—

・役所、農林商工部長を退職して「道の駅青洲の里」駅長。果物の着ぐるみの帽子をかぶり“フルーツの開発部長会議”なども動画で紹介。役所全体でフルーツでまちおこしをした。

・両親が営んでいた衣料品店を経営。地域の活動や、スローライフの活動も。

・紀の川市観光振興課、市民ワークショップを36回やった。猫の駅長が有名、今は紀の川フルーツ観光局。「空中の村」でフワフワを体験してきた。

・「心葉」主宰、日本の歳時記、お祭り、神道仏教系を教えている。「空中の村」、「玉置神社」「吊り橋」など訪れ、良かった。

・「スローライフ旬の店」で、7月は野迫川村の榎、8月は越谷藍染の手ぬぐいを紹介。十津川村は温泉もよく心も体もあたたかい、帰るのがさみしい

【暮らしについて】

・ゆっくり散歩道を歩いていて、子どもたちと大きな声で挨拶ができるという環境がいい。

・小学校3年の孫娘から山に連れて行ってくれといわれてうれしかった。松茸を



探しに運動靴で往復2時間、山を歩くのがほとんどで松茸を探すのはポイントを教えて10分。本当は山は地下足袋のほうがいい、そんな教育ができるといい。今は危ないから川に行くなということになっているが、魚の習性を身につけるといことも教えられる。山村留学では流しそうめんや薪で生活をする。都会の人は五右衛門風呂などを体験すると、「また来ます」と感動する。

- ・「イモたばり」という、お月見の時におやつをもらい歩く昔の風習が復活、この古くて新しい体験がいい。参加を、と声をかけられるというのがうれしい。
- ・端材を民芸品に加工している。手にもって木のぬくもりを感じ、わかってもらいたいと思って作っている。ネット販売もやっている、「いこら」でも販売、日曜日朝市でも。たまに売れる。
- ・ワークショップで木工品を自分で作ってもらい、ものづくりの大変さを一緒に味わってもらうのもいい。時間がゆっくり流れているのが良い。ここでは暗いことの怖さを覚える、でも美しさも知ることができる。
- ・「子ども、みといたるで」と、近所の人が言ってくれるのがうれしい。声をかけてくれるのがありがたい。帰ってきてよかったと思っている。
- ・部屋の電気を消して、空を見る。全部“星”という驚き。蛍も飛んでいる、たまにお酒を飲みすぎて蛍が飛ぶ時もある。取材をたくさん受けている。宿泊はコロナ前は、8月は1か月140人くらいだった。地元の盆踊り32曲、全部覚えている。地元8割の人は踊れる、楽譜なし、アカペラで締め太鼓のみ。歌はおなじだが、大字ごとに、みんな違う踊りだ。これを大事に伝えていきたい。
- ・だれかにあったら挨拶しなさい、と育ってきたので子どもたちにも教えている。たしかに、まちの子どもたちは人を警戒していると感じる。谷瀬は、現在こども7人、冬に2人増える。小さな集落に子どもがいるのは賑やかでいい。移動保育所みたいに、畑・田んぼ体験ができる。稲刈りをしたいという子どもは、前日からヘルメットをかぶっているくらい楽しみにしていた。本当の外部の人を受け入れる体制がまだできていない。少人数ならできるかもしれないが、多く来てしまったら手が進まない、兼ね合いが難しい。酒米の専用として作っている田んぼは商売としてなので、体験専用で田んぼをつくれればできるかと思う。
- ・家の中にいると子どもに小言を言ってしまうが、外にでて自然の中にいると子どもがのびのびしている。この子どもの芽をつんでしまうのは私なのかな？と考える。地下足袋をはいて4歳児が、角田さんや祖父と山を登った。親とはなれて参加したことで子どもの目の輝きも違っていた。

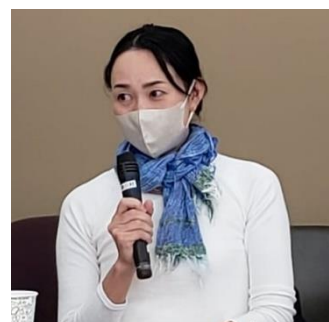


【観光について】

・これまでの観光は行きたいところに行って、食べて、次の場所に行った、忙しい観光だった。十津川だからこそその観光は考えるまでもなく「立ち止まってもらう観光」だと思っている。行き詰っている人が世の中にたくさんいるなかで、十津川は1時間半でかけ巡る旅は向いてない、立ち止まってコーヒーを飲んでホッとする。ワークショップでスプーンを作って山をみて2~3時間を過ごすところだ。東京に戻ったとき、長い時間滞在することによって生まれる、自分のストーリーや新しい気づきなどが楽しく感じられるだろう。何もないからこそつくれる場所。観光というより「旅」なのではないかと思う、こころもからだも豊かに、哲学的に教えてもらえる場所だ。

・十津川村はカメラを通して良さがわかる、暮らしの中にも良さがあふ、「玉置神社」にも祭りがある、地域にも祭りがある、いろいろなことを体験できるツアーが良いと思う。まかないはなく、施設だけを貸出するという「山の家」で、なんにもないのが良い。星もきれい、料理を作って、飲んで、食べて、しゃべる、のんびり感がよくてリピートが多い。経営的にはもうからない、1泊4000円。年間200万くらいで世話をしたり、光熱費もかかりもうからない、お年寄りのお遊びではあるが。

・「十人十旅」というツアーを組んでいる。始めて間もなくコロナ禍になってしまった。一日では十津川はまわりきれない、泊まってもらう。タクシー会社、旅館と組んでいる。インターンの方が十津川を気に入ってくれてコロナが落ち着いたたらまた来てくれるということになっている。



・滞在して経験してもらうのが一番いい、角田さんもいろいろやってくれている生き残りが一番大事。

・十津川に帰ってきてから、遊びに来てくれる友達もいるがコロナが落ち着いたからと言っている。母がSNS、ネットで雲海、玉置神社でのまかない、御朱印などの写真をアップしている。ネットをみて来られる人が結構いるので、もっと活用していったほうがいい。

・十津川温泉は源泉かけ流しが一番メインだと思う、もっと活用していただきたい。平均すると2泊から3連泊が多い。

・最近ゆっくりではなくなっている感じがする。吊り橋まではきてもらえるが、村の中まで観光客はこなかった。「ゆっくり散歩道」が出来て、集落まで観光客がくるようになった。それが来村者のマナーが気になる、竹の筒に、ジュースのお金を入れるのが100円でなければいけないのに1円という人がいる。ゴミな



ど置いていくなど、がっかりすることもある。展望台などまで来て良かったという人もいたので、それは嬉しい。

・お土産が欲しい、会社に配りたいけど商品がないな・・・、という感じ。クッキーもお土産になるかもしれない。

・皆さんの熱い気持ちがひしひしと伝わってきた。紀の川市で観光に携わっていた。私が考える6次産業化はすべて「人」が大事である。1次があり、2次があり、提供する人、情報を発信する人、が上手に連携すること。一つ一つ皆さんのやっていること、素晴らしいことが、点と点、それを線に繋いでいただければと思う。その線をつなぐのが観光の6次化と考え、それができれば十津川の観光となるのではないかと思う。紀の川では23年やってきて、「フルーツの紀の川」になっている。十津川の頭文字を使って「遠くても、とっても素敵な村、いつでもみんなで何度でも来なくなる村、頑張り屋さんが多い村、私たちもゆっくり十津川村」

・掛川の地元にお土産物がないと感じていた。自分たちは、里山でとれた栗を使い、市民活動の一環で栗焼酎を作っている。掛川市を語るうえで、栗焼酎があることにより掛川のストーリーをもっと語ってもらえる。住民が携われるようなもので出来たらいいのではないか。点と点を線でつなぐ、の一つが自転車。住民が自分の言葉で掛川を語れる、また来年もこの人に会いに行こう、など自分の言葉で語れることで自分が商品になる。

・結婚を決めたのが「谷瀬の吊り橋」。蜂蜜の瓶のそこまでスプーンが届く木のスプーンを、以前、川上村で手作りで作った。だから木工はいいと思う。「ゆっくり散歩道」で地域の方から温かみをいただいた。どっぷりと十津川にはまっている感じだ。地域のゆたかさ、暮らしをおすそ分けしてもらっている。観光ってその地域にあるもの、そこに暮らしている人から、その豊かさをちょこっとおすそ分けしてもらおうことだろう。

・観光の観という字は「心で見ることだ」と教えてもらったことがある。まさに心で見ると観光というのはここにあると感じている。次に光という字がつくので、光というもので見る観光だと思っている。

・女が仕事をするということが大変なのに、衣食住を仕事にしているのは本当に大変だと思う。点と点を繋ぐという視点で考えると、可能であれば谷瀬にブラ

ンコを一つ置く、そして「空中の村」にもあるよ、子どもたちがもっと遊びを広げていく。もう一泊しよう、足湯に行こうなどとなるのではないか。十津川に来た人を逃がさない、リピーターを増やしていけばもっと楽しく仕事ができるだろうと思う。

・十津川という言葉をもじっていただき、ありがとう。役所に40年いた、「遠都川」といわれていた古文書がでてきていたのを思い出した。良いことを言ってくれた。

・本当の意味の自分を見直すという、「自分修行の旅」ができる。十津川村は裸の自分と付き合っていただけのような気がする。

・十津川の豊かな自然のなかで、外で遊ぶのが良い。でも十津川に住んでいても、十分体験しきれしていない、すべてを知らないから味わえないことがある。助けあえる、声掛けあえるのが都市部にはない、十津川の文化を魅力に感じる。となりの家に遊びに行くなど、子どもを自分の家だけで育てなくてもいいという環境が素晴らしい。

・畳の廊下を子供が走り回り、おじいちゃん・おばあちゃんが追いかける。この様子を見るのも観光の一つだ。

【アドバイザーから】



観光が多彩になっている。若い人の検索の方法も変わってきている。昔だったら気づいてもらえなかったことも、今は気づいてもらえていると感じる。十津川しかないこと、それを強みにしたい、活かしたら良い。村のなかの人たちがおすすめを各場所、場所で紹介しあうことにより広がっていく、ちょっとずつ繋がっていったら素敵だと思う。最近「暮らすように旅する」という言葉が出てきている。体験したい、滞在したい、暮らすように、助けあう文化、何でも作ってしまう、お互いあげる文化とか、1回でも感じられると、また行きたいとなる。十津川村の蜂蜜は村の中の花のはち蜜だよとか、みんなで手作りしているお茶なんだよとか、もっとストーリーを伝えていけばよいお土産ができるようになる。今や観光協会では何かやってもらえるのを待っているのではなくて、私たち一人ひとりが観光協会だ。暮らしを丁寧に紡いでいくところが観光振興につながる。



2) 視察見学

- ・登壇者も含む全 36 人のうち、18 人は貸切バスで視察見学をした。
- ・コロナ禍で、バスに乗る人数を少なめにしたため、車で移動の方も多く、それぞれにあらかじめ郵送したパンフレットを参考に、自主視察をする形をとった。

■日時：11月20日（土）12時～17時15分

■視察先：「谷瀬集落」「高森のいえ」

■参加者：村外 18 名

11時45分：近鉄橿原神宮前駅集合

12時00分：出発

・車内で奥大和の味「柿の葉寿司」昼食。これから訪ねる谷瀬集落の伝統珍味「ゆうべし」も味わう。

・村についてのビデオ鑑賞、「十津川鼓動の会」の語り部から案内を受ける。

・まだまだ生々しい紀伊半島大水害の傷跡も車中から眺める。

14時00分：十津川村谷瀬集落視察。担当者から説明を受ける。

・昭和29年、一軒20万円ものお金をだして集落の力で掛けた「谷瀬の吊り橋」。今は村で一番の観光スポットに。

・集落の人々が整備した「ゆっくり散歩道」。そこに造られた水車や復興住宅を見学。

・加工場「つくりば」を見学。新たな地場産品干し芋が盛んに作られている。





- ・空家を集落と奈良女子大生が整備した休憩所「こやすば」を見学。
- ・内部に展示された昔の暮らしの写真を鑑賞。
- ・集落の住民が運営する「吊り橋茶屋」の新開発商品「酒粕アイス」について。集落の開発者から感想を問われ、参加者からは好評を得る。

16時00分：「高森のいえ」視察

・特別養護老人ホーム「高森の郷」の隣接地に、平成29年に完成した村営住宅。集落から離れた地域で高齢者が孤立しないように、ここに集まって暮らす施設。担当者から説明を受ける。



・一般向けの住宅棟もあり、周囲の住民とも交流でき、周辺の子どもたちが遊んだり、イベントにも使われる広場も。心の安心もある。

・十津川産の木材をふんだんに使った室内。見学者から「うらやましい」の声が上がる。



17時15分：十津川温泉着。

■日時：11月21日（日）8時～9時30分

■視察先：「果無集落」

■参加者：村外23名※車利用者も同行

8時00分：十津川温泉出発

8時15分：果無集落視察

・「十津川鼓動の会」の語り部から案内を受ける。

・ちょうど朝霧に包まれた山々が美しく、世界遺産の古道に皆が感激する。

・地元の方々の、訪れる人への小さな心遣いに感心し、「人に会わなくてもぬくもりを感じた」と感想が。



このほかフォーラム終了後も含めて、「空中の村」「玉置神社」「道の駅十津川郷」などに何人もが立ち寄った。



3) フォーラム

- ・コロナ対策に気をつけながらの開催となった。
- ・入口、ステージなどには十津川村の山の幸などが彩られ、村の盆踊りの音楽を流した。
- ・総合司会は長谷川八重（スローライフ学会、スローライフ掛川）が担当し、村内外から希望者がオンラインで参加した。

- 日時：11月21日（日）10時～12時30分
- 会場：十津川村民ひろば
- 参加者：約100人
- 主催：奈良県
- 協力：十津川村、スローライフ学会

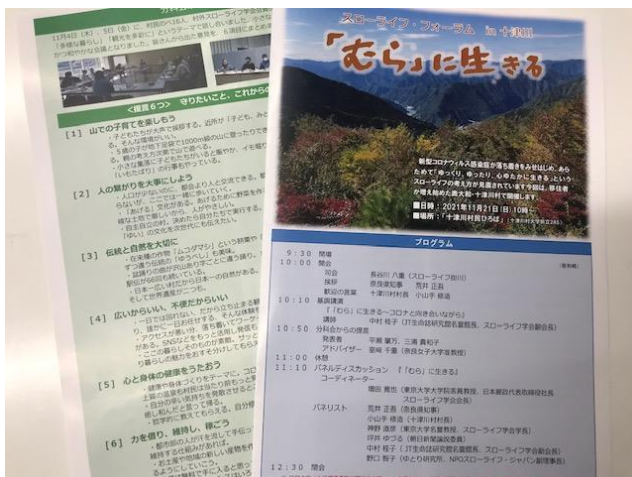
■プログラム

- 9時30分 開場
- 10時00分 開会
- 10時10分 基調講演
- 10時50分 分科会からの提言
- 11時00分 休憩
- 11時10分 パネルディスカッション
- 12時30分 閉会



■資料

参加者には当日プログラムを配布した。



①挨拶

奈良県知事 荒井正吾

永年地方おこしをテーマにされているフォーラムが、十津川に来られました。川島正英さん（スローライフ学会）自身は残念ながら来られませんでした。お志を次いで立派な仲間がたくさんいらしていただきました。地元、奈良県としてはとても光栄なことです。今日は限られた時間、限られた人数になりましたが、ぜひ、志の高い話を聞かせていただき頭を活性化したいと考えています。貴重な時間をごゆっくりお楽しみいただけたらと思います。



②歓迎の言葉

十津川村村長 小山手修造



スローライフ学会の皆様、遠方よりおこしいただき心より歓迎申し上げます。村内の皆様もお越しいただきありがとうございます。いま、地方の弱みを強みに変えて地域の活性化に図ろうという気運があります。外部の目線で気づきを与えていただく、このことが何よりも大切です。フォーラムが開催されたこと、ご助言いただいたことを、今後、十津川村に磨きをかけていく、契機にさせていただきたく思います。

③基調講演

■タイトル：『「むら」に生きる～コロナと向き合いながら』

■講師：中村桂子（JT 生命誌研究館名誉館長、スローライフ学会副会長）

今日の話の題は“「むら」に生きる”です。普通だったら村に暮らすだと思います。村に生きるってかなりの覚悟がいる、そんな風に私には思えます。こういう題が出てきたのもこの村の方たちが、スローライフ・ジャパンも少しお手伝いをしながらですが、これまで真剣に考えていらしたからだろうと思います。あまり深く考えずに村のこれからを、となると、村で暮らすぐらいになります。“「むら」に生きる”ということになったところに意気込みを感じます。今日はコロナにプラス、異常気象を加えてこのようなめんどろな問題のあるなかで単に暮らすではなくて、これからどう生きようかということをお皆さんと真剣に考えたいと思います。

今日のプログラムに「6つの提言」がありますが、そのなかにそういう気持ちがとても込められている。私がこれに加えることはありません、けれども外から来た何も知らない人の話を聞いていただくとちょっと違う視点が入って、これからまた新しいことがお出来になる、役に立ってくれたらいいなと思っています。

昨日は東京から新幹線に乗って京都から近鉄に乗って、それからバスに乗っ



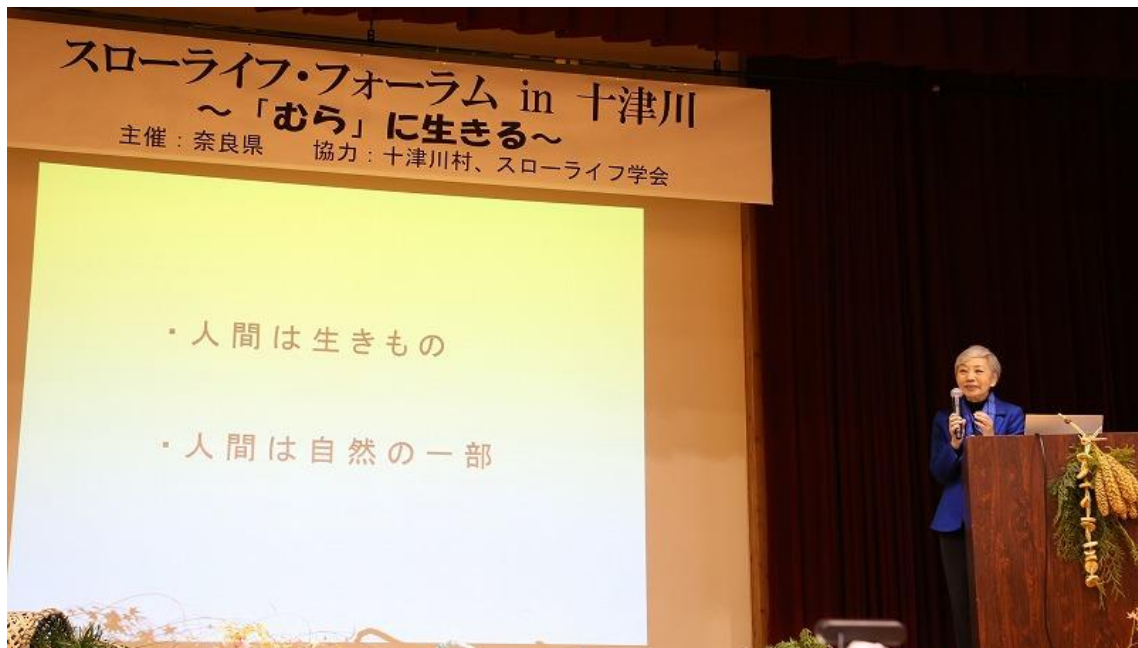


て来ました。何がいたいかと申しますと新幹線は速度 300 km 近くで走る、そして近鉄でもうちょっと遅くなって、バスで遅くなって、だんだんだんだんと速度が遅くなっていく。高層ビルが林立しているところから出てきましたが、着いたら木がいっぱい立っている森の中だった、あつという間にこういう体験をしたわけです。

どんどんゆっくり遅くなってきた、ここに着いた途端私はちょっと懐かしいって感じたのです。懐かしいという感覚はいろんなことを考えるときにとても大事なものです。懐かしいという気持ちがあると何かがしたくなる、そういう感覚だと思います。初めてなのに懐かしいと思う、何で懐かしかったのかという一つはその時間です。遅くなってきて段々ある意味不便になってきた、それはちょうど私の子どもの頃に戻ったような感じがした、そういう戻った「子どもの頃の懐かしさ」が一つです。

もう一つは、私は生きものの研究をしていますので人類、人間です。人間のスタートは 20 万年前にアフリカの森から始まりました。森がなかったら人間は生まれていない。そこからだんだん進化して 20 万年も経って、現代の生活をしているわけです。私たちの体はその間ほとんど変わっていない、私たちの体のなかにはおそらく森の中で暮らしていたその「人類の懐かしさ」みたいなものが入っているのだと思います。個人的な懐かしさ、人類としての懐かしさ、この二つをここに来たときに感じました。

コロナと異常気象のなかで、世界中の人が何か変わらなければならないと考えています。しかし高層ビルが林立していてもものすごく早い時間が流れているところでは戸惑いしかない、この先、何があるのだろうという感じだと思います。むしろこの村のように「不便」という感じがあり、それから「森」がある、おそらくこういう状況のなかからこそ新しいところへ向かって行けるのではないかと感じました。村がどう生きていくかというテーマで十津川村のことを考えるのがこのフォーラムでの大事なことですが、これはおそらくこれから人類がどう生きていくかという、大きなことにつながるのではないかと思います。



「人間は生きもの、人間は自然の一部」 私はこう考えています。ビルが林立してすごく早く動いているところの人々は生きものとして生きていない、おそらくこの村では生きものとして生きることができるだろう、それが未来に繋がるだろうと、そんなことを考えたいと思っています。

産業革命以降の人口の伸び、これを成長、成長といっているに追いかけている。何かとっても異常に私には思えます。これを支えているのが、おそらく同じように伸びているエネルギーです。これで異常気象が起きている、この先どうするのだろうかって考えます。

私が初めて研究の世界に入ってもう 60 年以上、最初に行った研究がバクテリアを培養して、それで遺伝子の研究をするということでした。試験管の中に栄養分を入れてほんの少しのバクテリアを夕方帰る時にちょっと入れ、37℃のところに一晩置いておくと、ものすごく増えます。一兆個のレベルに。バクテリアは一晩でこれをやってしまうのです。こうなった時にどうなるかという、必ず定常状態に入る。そのまま伸びることは決してない、生きものは定常状態に沿わなかったら死にます。それを私はずっと体験しているので、この状態があったらこれは何とかして定常状態に持ってかないと、生きることは出来ないと思っているわけです。

産業革命以降のこういう状況が何で起きたかそれは近代産業、そこでエネルギーを沢山使って便利にして暮らしやすさを求めてきた。何も悪いことをしようと思ったわけじゃない、暮らしやすさを求めてやってきた、機械をどんどん使ってきたのですけども。ルイス・マンフォードがっています。「近代産業のカギとなる機械は、蒸気機関ではなく時計である」私これはとても適切な言葉だと



思います。機械は蒸気機関で始まって、自動車となって、それで産業世界は今みたいになったのだと普通はいわれるのですけれども、実は一番大事なものは時計だと、彼はっています。時計は時間の管理であり、便利さを求める象徴です。

「便利」とは、一つは、効率的に早くできること。二つ目は手が抜けること、手をかけないで済むように。三つ目は思い通りになることです。ご飯づくり一つ考えても、炊飯器は早く炊け手が抜けて思い通りに炊ける。とってありがたい、かまどで炊けといわれたら私にはそんなことできません。そういう意味では機械は便利で、ありがたいものです。

ただこれは生きものとは違うということは知っておかなければなりません。生きものは時間がいります。赤ちゃんが育つためには時間がいります。二番目の手が抜けることも、皆様の方がよくご存知だと思いますけど生きものは手を抜いたら、作物だって、お花だって、子どもはもちろん上手には育たない。だから手がかかる手が抜けない。三番目の思い通りになるも。自動車はアクセル踏んでブレーキ踏むで、それで思い通りになります。生きものはちっとも思い通りになりません。

でも思い通りにならないからこそ思いがけないことがあって、ある意味豊かなものを生み出しているわけです。その「便利」に対応する生きものを見ると時間がかかる手がかかる思い通りに行かない。そこに生きものらしさがあってこれが言葉でいえば「不便」かもしれない。でも私はこの不便さにむきあって、これを上手に使っていったらいいのではないかと思います。例えば子どもまで機械みたいに早く早くっていても無理で、作物に早く育てといても無理で、そういうところでその不便さにもものすごく意味を見つけてそれを上手に活かして、不便で困ったね、嫌だね、じゃなくて不便さを克服して不便さから新しいものを生むという努力を今やるのが、きっとクリエイティブなことを産むことに繋がると思います。

この十津川へ伺って二日間過ごしているうちに、もし私が十津川村の村民だったらこんなことをやってみたいということを思いました。東京だと、特にAIとかやっている私たちの仲間には、心も体もちょっと辛くなっている人たちが割合います。そういう人たちに来てもらって五日間時計を外す、時計無しの生

活をしてもらう。東京では出来ません、ここだったら時計無しの生活ができると思うのです。何を目途にするかという太陽です。一つ私たちは自分の中に体内時計を持っています、それぞれの細胞のなかにも時計が入っていて、その時計がきちんと動いている時私たちはとっても気持ちがいいということが分かっています。私はスローライフのスローは「生きものの時間」だと思っているのですが、スローライフの会合でも現実には「あなた 10 時 10 分だからちゃんとここに来てね」と今日はいわれました。それをやるしかないわけです、現代社会では。

時計を外し五日間ぐらい何でも好きな時にご飯食べていいですよ、好きなときに遊びに行って集まってやりなさい、そしたらその時にちょっとお茶出しておあげますよ、みたいなそういうことをやったらものすごく健康になるんじゃないかと思います。最初はめちゃくちゃで迷惑かもしれませんが、変な時にご飯食べたいっていわれたりすると。おそらく続けているうちにリズムが生まれてくると思う、そういう形で暮らせたならその人はとっても健康になって幸せになって、もしかしたらずっとここに住みたいっていうかもしれないなって、これ私の妄想ですけども、そんな時計を外す生活が考えられるのではないかと思います。

時間のことを考えましたが、もう一つこの“「むら」に生きる”ってどういうことだろうといくつか考えてみました。先ほどの定常という話、この定常にならなければいけないということをいいますと、私たちだって実はそれを知っているわけです。私たち生まれて育ててそしてある程度まで育ち、そこでもう伸びはしない。そして残念ながら老いていってそして死ぬ、その生まれて育てて成長しいろいろなことをやって老いて死ぬという全体が「生きる」ということ。成長が生きていくということではない、というのがあきらかなわけです。

昨日、「高森のいえ」を見せ
ていただいたのですが、まさ
にあそこは生まれて、そして
子どもたちが育ておとなに
なっている生活をして、
そして老いて死ぬという全体
を考える場になっていると思
いました。“「むら」に生きる”
という言葉のなかには、生ま
れ、育ち、老い、死ぬという流
れがあり、この流れをいかに
上手にできるのかが「生きる」
ということだと思っていま



す。それを支援するシステムはこの村ならできると感じました。

私は東京に住んでいますので村を知りません。「村」という字を生まれて初めて辞書で引いてみました。『広辞苑』、こちらでは「地方公共団体の一つ」と。それはそうでしょうと思いました。私の好きな辞書、三省堂の『新明解国語辞典』辞書が人格を持っているような辞書です。こちらでは「農業・漁業に従事している人家が何軒か集まって集落をなしている地域、周囲が山林、田畑、海などに囲まれていて夜になると寂しくなることが多い」とあります。夜になると寂しくなることが多い、ここがすごく気に入っています。もう一つは、「地域、血縁による結びつきの強い伝統的な共同体（生活様式）の象徴として用いられることがある」ある意味とても大事なことです。55の大字があり、それぞれの伝統がありそれを大事にしているけれども、一方でこれが今の若い人たちにはちょっと面倒、束縛感になっていることがあるかもしれない、こういうところを考えると村ってこういうことなのだということ、ここからいろんなことを考えられるなと思います。

新聞を読んでいましたら、ある追悼文にこんな言葉が書いてありました。「一人の子どもを育てるには、一つの村がいる」アフリカの諺だそうです。アメリカのコリン・パウエルさんという黒人ではじめて国務長官になった方、アメリカのとても重要な位置でお仕事された方が亡くなりました。政治はよくわかりませんが、この方で思いだすのはイラク戦争を大量破壊兵器が本当はないのに「ある」といって始めてしまった。国務長官ですからとても責任がある、コリン・パウエルさんは最後の最後まで「あれは間違った判断だ」といって非常に悩んでいたということを知って、私はとても誠実で素晴らしい方だと思っていました。

その方が亡くなったときにこの言葉がありました。アフリカ系の黒人で、黒人のなかで育てるとても貧しい子どもだったのだけれども、その黒人仲間の村、仲間たちがパウエルさんを育てた、アフリカにはそういう考え方がある、と書いてありました。これを読んだときに明らかにおもったのは、町や市が、ではこういうふうにはなりません。「一人の子どもを育てるには、一つの町がいる」といってしまったらそんなことはできないよと思ってしまいますが「一つの村がいる」といったら、子どもは育つだろうなと思います。最近是人材育成といいますが、ここでいう「育つ」は、人材育成ではなくて人間を育てるということになる、それには村

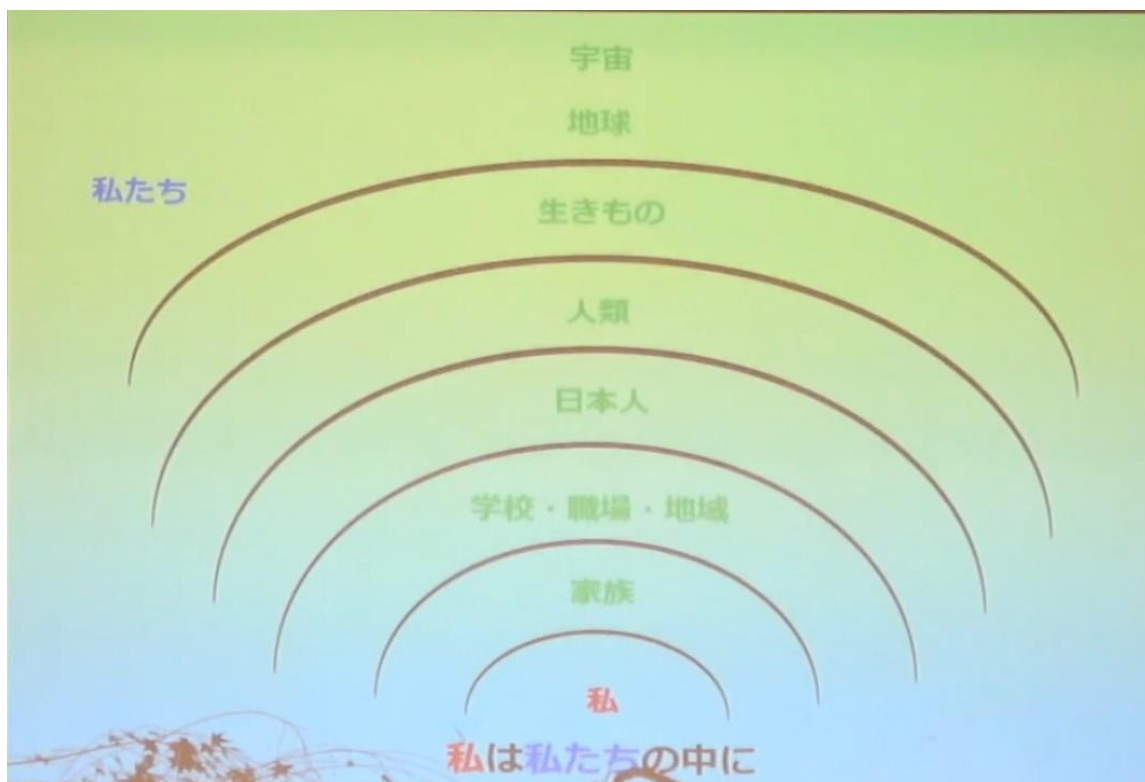


というのはそういう場所だと、十津川村はそういう状態があるような気がします。

つながりを切っていったのが効率、もしかしたら不便さというなかにはこのつながりを大事にするということが入っているのではないのでしょうか。コロナでも異常気象でもいろんな災害にあうたびにつながりの大切さを多くの人が感じています。よく思い出すのは東日本大震災のときに、「絆」という言葉が使われました。みなさんの気持ちはよくわかるのですが、絆というのは辞書で引くと家畜をつないでおくものなのです。つながりはあるのだけれどもある種の束縛感があります。

最近の本屋さんでは「利他」という言葉があふれ、利他について書かれた本がいろいろ出されています。これも大事ですが、この利他というためには「利己」がある、本当は私が大事なのだけれどもやっぱり他も、というのが利他であると思います。実は「私」というのは利己とかではなくて、まず「私たち」というのがあって、私たちのなかに私がいるのではないかと思います。

私は私たちのなかにいる、家族があり、学校や職場があり、日本人という仲間があり、人類という仲間があり、私たち生きものがあります。家族とか、学校とかというのはある種のしがらみがありちょっと辛いものもあるので、私はそこをつき抜けて「私たち生きもの」という感覚をまず持つことがとても大事だと思っています。最初に「私たち生きもの」という感覚を身につけて、そこから私たち人類とか、私たち家族とか、なかへと入っていく形で行動を執ると、とてもお

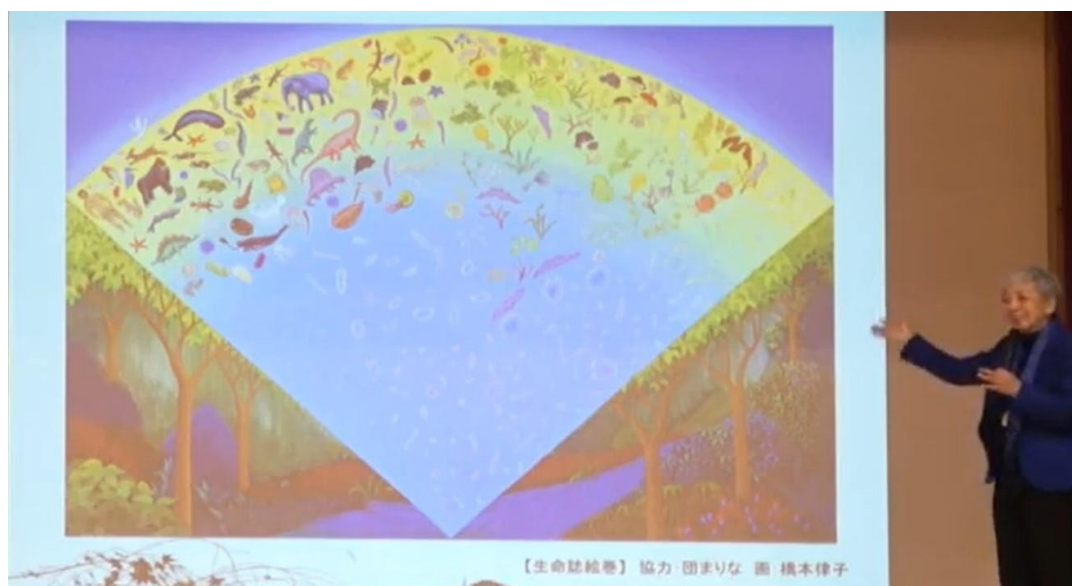


おらかになって新しい「生きる」ができるのではないかと思います。

ここに生命誌の絵があります。ここから三つのことが読み取れます。扇の一番上にいろいろな生きものが描いてあります。バクテリアがいて、キノコがあり、ヒマワリがあつたり、イルカもいたり、本当に多様です。生きものというのはどんどん多様になる、生きものは続いていきます。私たちが今、コロナや異常気象で考えているのは、続いていけないのではないかということ、どうやって続いていくのだろう、上手に続いていくにはどうしたらよいのだろうということですが、生きものはどんどん続いてきました。続いてきた原因は何かといたら多様化したことです。今、何千万種と生きものがいて、あらゆるところに住んでいます。この絵からわかることは、私たち生きものは多様であるのが大事ということ、これが一番。

多様でいろいろなものがいてもみんなバラバラではおもしろくない、じつは生物学は生きものはすべて細胞でできていることを証明して、こんなに多様だけれども、もとは同じ細胞から生まれてきたということを示しました。これが扇の要のところ。これが 38 億年前、その 38 億年前の一つの細胞から今の多様がある、多様性をみとめていろんな生き方が大事だと思うのですが、実は仲間なのだというのが二番目。同じ細胞から生まれているのですから。多様なだけれども仲間なんだという感覚が「私たち生きもの」という感覚です。

それからみなさんが学校で生物学を習ったときに下等生物とか高等生物とかいう言葉があつたと思います。今は生物学のなかにそういう言葉はありません。なぜなら、みんな 38 億年の歴史をもつ生きものなのです。あらゆる生きもの、アリも 38 億年かけてここにいる、お腹にいるバクテリアも 38 億年かけている、全部が 38 億年の歴史を持っている。それはすごく重いもので、それぞれがそれぞれに、それぞれらしく生きていて、38 億年の歴史は全く同じな



のです。上下はない。

これは「進化」と申します。進化というのはエボリューションといって展開です。一方「進歩」プログレスというのは一本線です。高層ビルを林立させて忙しくやっているところは進歩を求めてきました、一本線でやってきた、だから辛いのです。展開していけばいいのです。なんでもいいよといって展開して、根っこは同じだよといってみんな同じ上下なしということ、それが三つ目です。

現代社会では、多様性を認めながらもこの扇の上に人間が、自分たちがいると思っている。「上から目線」で「生物多様性大事にしてやろうね」とおっしゃっていますが、実は人間は扇のなか、つまり他の生きものと同じところにいるのです。私はこれを「中から目線」といいます、中から目線での「私たち生きもの」感を共有していただきたいのです。「生きもの」の上は、地球であり宇宙があります。宇宙とつながり地球とつながり私たち生きもの、というところからだんだん私たち日本人だよ、家族だよとくると、とても広がった気持ちになるのではないのでしょうか。私はこの十津川であれば「私たち生きもの」という考えは、必ず持てるはずだと思います。

ここで人数のことをちょっと考えたいと思います。実は人間というのは森で生まれたのですけどちょっと弱かったのです。なぜ二足歩行にしたかといいますが、食べ物を取りにいったときに家族にそれを持って行かなければならいので二足歩行したというのが最近の説で、私はそれが大好きです。弱かったから新しいことをやった、弱いといろいろな新しいことをやらないとならないので、考えていくと思います。人間の特徴は共食することです。みんなと一緒に食べる、それを持っていくために歩いたのです。子育ても人間の場合は一緒に育てます。親子だけではなくて、おじいさん、おばあさんも一緒になって育てるといなのが



人間の特徴です。その家族はだいたい10人くらいです。

狩猟採集など始めて、狩りが必要となるとだいたい30人くらいの協力が必要になります。そして私たちの脳でいつも仲間と考えられる大きさは150人です。脳の大きさと付き合える人数が分かっている、人間の脳の大きさと付き合えるのは150人です。

10人でスポーツをやる、

野球もサッカーもこれくらいです、以心伝心で一緒にできる仲間は10人くらい。クラスくらいになって、少し決めごとを作って一緒にやっていくのがほしい30人くらい。それからお互いよく分かり合いながら、しかし広くやっていく地域社会になってきたのが150人。人間のつながりの数はこんな感じです。今、ネットでどんどんつながることはできて、それをやってはいけないとは思いますが、この生き物としての人数はこんなベースがあるということを思いながら、つながりをしっかり作っていくのもとても大事なことだと思います。

私たち人間だけができることは、「想像」することです。他の生きものにはできず私たちだけできるのは想像、他の生きものには想像力はありません。よその人のこと、過去のこと、未来のこと、いろいろなことを考えられる、想像できる。それから「分かち合う心」。強い人が、弱い人に分けてあげる。他の動物の世界だと強いのがどんどん取ってしまうのですけれど、強い人こそ相手に分け合えるというのが人間のもっている分かち合う心です。世代を超えての協力も人間だけが持っている能力です。おじいさん、おばあさんと孫の関係は人間特有のすばらしい関係なのです。先ほどのつながりのなかにこれらのことを入れていくと“「むら」に生きる”というのがとっても具体的に進んでいくと思います。

現代の都会は便利で、機械的で効率的で簡便でグローバル。スローは「生きもの」の時間です。歴史性がある、地域性がある、文化ということ。文明より文化を基本にする。文化というのはカルチャー、カルチャーって耕作ですから土に根差していて、しかも教養につながっていく、こういう形が“「むら」に生きる”ということになっていくのではないかと思います。「時間」と「つながり」、十津川村というのはこういうことを考えるのに、とっても大きな可能性を抱えていると感じました。

いつも自分のなかで考えていることがもし十津川村のどこかで活かしていただけなら嬉しい、ありがたいと思っています。役に立てる話ができるかどうかとずっと悩んでいましたし、今も同じ気持ちですが、どこか拾っていただけたらとても嬉しく思います。

どうもありがとうございました。

④分科会からの提言

- 発表者：室崎千重（分科会アドバイザー、奈良女子大学准教授）
平瀬肇万（分科会参加者、十津川村武蔵在住）

室崎：

私は2014年から谷瀬集落に学生とともに通ってきました。11月4日（木）、5日（金）で、村民と村外の方々が、「多様な暮らし」「観光を多彩に」というテーマで話し合いました。小さな子ども達も参加し、真剣でかつ和やかな会議となりました。皆さんから出た意見を、ここに6つの項目に凝縮しました。

分科会では私が十津川村に通うなかで魅力的だと感じてきたことの理由が、明確化されるようなきらめきのある言葉がたくさん出てきました。



平瀬：

武蔵で体験型宿泊施設をやっています。私は伝統を大切にしたいと思っています。この村は「盆踊り」が盛んで、地元の8割の人は踊れます。ただし譜面はない。歌は同じものがありますが、踊りは字ごとに違います。それがすごいことだと思います。源泉かけ流しの温泉文化も貴重。村民には当たり前の、この多様な生活文化を大事にしていきたいです。

室崎：

同じく分科会参加者で、村内でデザイン会社を立ち上げた三浦貴和子さんは本日、発表予定でしたがご都合が悪くなりました。このようなご意見が届いています。

「この村は暮らしそのものが魅力的です。何があるというよりも、人との関係があたたかい。煮詰ってしまったときに、温泉にはいたり、森に行ったり。身近なところで自分の辛い気持ちを発散させることができます。これからの観光はこういうことだと思います」

皆さんこれから、この6つの提言を意識しながら暮らしていきましょう。

【提言6つ】 守りたいこと、これからのこと。

1、山での子育てを楽しもう

- ・子どもたちが大声で挨拶する。近所が「子ども、みといたるで～」と声をかけてくれる。そんな環境がいい。
- ・5歳の子が地下足袋で1000m級の山に登ったりできる。戻ってくると目が輝いている。親の考え方次第で山で遊べる。
- ・小さな集落に子どもたちがいると賑やか、イモ堀りも稲刈りも移動保育所みたい。「いもたばり」の行事もやっている。

2、人の繋がりを大事にしよう

- ・人口が少ないのに、都会より人と交流できる。都会では何でも一人でやらなくてはならないが、ここでは一緒に歩いていく。
- ・「あげる」文化がある。あげるために野菜を作る。もらえば自分もあげたくなる。急峻な土地で厳しいから、人がやさしい。
- ・自主自立の村。決めたら自分たちで実行する。なかったら、みんなで作ればいい。「ゆい」の文化を次世代にも伝えたい。

3、伝統と自然を大切に

- ・在来種の作物「ムコダマシ」という餅粟や「十津川高菜」を作っている。各地で少しずつ違う伝統の「ゆうべし」も美味。
- ・盆踊りの曲が沢山あり、字ごとに違う踊り。8割の人が踊れる。村民が張り切る手作り駅伝が66回も続いている。
- ・日本一広い村だから、日本一の自然がある。夜、空を見ると、全部星。蛍も、珍しい花も。そして世界遺産が2つも。

4、広いからいい、不便だからいい

- ・一日では回れない、だから立ち止まる観光を。滞在して、ご飯を炊いたり川で遊んだり、誰かに一日お任せする、そんな体験も。
- ・アクセスが悪い分、落ち着いてワーケーションをするのにいい村。仕事ができる環境がある。SNSなどをもっと活用し発信しよう。
- ・ここの暮らしそのものが素敵。サッと回れないから、何かを見るのではなく、ゆっくり暮らしの魅力をおすすめ分けてもらえる。

5、心と身体を健康をうたおう

- ・健康や身体づくりをテーマに。コロナ禍で屋外の遊びに注目が。「源泉かけ流し」の上質の温泉も村民は当たり前もっと発信を。
- ・自分の辛い気持ちを発散させるところが身近にある。温泉や山や。来訪者も疲れた心を癒し、和んだと言って帰る。
- ・哲学的に教えてもらえる。自分修行の旅ができる。裸の自分と付き合ってもらえる村。

6、力を借り、維持し、稼ごう

- ・都市部の人が汗を流して手伝ってくれ、それで癒されたと喜んで帰る。外の力で村を維持する仕組みがあれば。
- ・お土産や地域の新しい産物を作ろう。そして、関わった人たちがきちんと報酬を得られるようにしていこう。
- ・自然は無料で手に入ると思っている都会の人に、維持する苦勞をきちんと伝える。この村にビジネスチャンスはいろいろある。



⑤ パネルディスカッション

■ テーマ：“「むら」に生きる”

■ コーディネーター：増田寛也

（東京大学大学院客員教授、日本郵政代表取締役社長、スローライフ学会会長）

■ パネリスト：

荒井正吾（奈良県知事）

小山手修造（十津川村村長）

中村桂子（JT 生命誌研究館名誉館長、スローライフ学会副会長）

神野直彦（東京大学名誉教授、スローライフ学会学長）

坪井ゆづる（朝日新聞論説委員）

野口智子（ゆとり研究所、NPO スローライフ・ジャパン副理事長）



増田：

今日は会場にご当地の珍しいものを飾り付けていただきまして、地元の皆様にこのような形で設定していただき感謝申し上げます。このスローライフ・フォーラムは、2013年に奈良県では川上村で開催、その時も荒井知事さんにお出ましをいただいています。それ以来8年ぶりで奈良県での開催です。知事さん、そして村長さん以外は、基本的にはよそから見た

十津川村、奈良県の南部東部についてお話をすることになります。そういったやり取りの中で、こちらの地域の皆さんにも何か感じ取っていただければと思います。

最初に少し宣伝を。私、昨年から日本郵政の会社で働いておりますが、この十津川村にも7つの郵便局あり、大変皆様方にお世話になっておりますし、局長さん以下、社員の方々も地域を支えるという仕事をいただいている。改めて皆さま方に感謝申し上げます。

私自身こちらへきて様々なこと、非常に多くの事を学ばせていただいております。十津川村にきたのは、2018年2月以来。今朝「果無集落」まで連れて行っていただき、雲海の中にちょうど峰々が見え、集落の生きざまというのを見させていただきました。

さて、パネリストのスローライフ・ジャパンの野口さんが、実はこちらの村の谷瀬集落に大変深く入っておいでです。なぜこれほどまでに十津川村、谷瀬にほれ込んで、何度も来ているのか、まずはその想いを語っていただければ。



野口：

これまで 30 カ所くらいのいろいろな規模の土地でこのフォーラムをやってきました。人口 3000 人ちょっとの村で、会場に並べた 100 いくつかの椅子がうまっていることが本当にうれしいです、ありがとうございます。

2012 年こちらの紀伊半島大水害の爪痕がまだひどいころから、奥大和、奈良県の南部東部に入ることになりました。これは県のご紹介でうかがうようになったのですが、そのなかで十津川村、谷瀬に通うことになりました。むらおこしの手助けです。谷瀬集落に入って最初に思ったことは、これは今までのやり方ではいけないな、というのが第一印象でした。私のような者が、皆さんの「寄合」にお邪魔しても、「よう来たな」という感じ。つまり自分たちに自信があって、よそから来た人を「いいよ、仲間に入れてあげるよ」と同じ立場で立っている感じでした。

しかし、なぜ谷瀬に通うようになったかです。どんどん人口が減り、このままでは死人は増えるが、子どもは増えない。切実なところに来ていた。それまでは集落に人が入ってくると村が荒れるので、吊り橋の奥には人を入れられないという方針だったのですが「これからは何とか人を入れましょう」ということで話し合いが始まりました。ワークショップをやって、みんなでこれからどうしましょう、とアイデアを出しました。次に来るとそのまま、という所が多いのですが谷瀬は違いました。

「これをやろう、いつまでにやろう、誰がやろう」というところまで決めますと、一か月後に私が来るとできている。何も発言しないでいたおじいちゃまが、次に来た時にはベンチを作ってしまった。水のみ場を作ってしまった。それができる。都市部の同じ高齢の男性でしたら、水飲み場を作れますか？しかも丸太をくりぬいて、そこに沢の水を流し込んで。吊り橋の板を使ってベンチも。展望台を作るために木を伐って、というところまでやってしまう。言葉は少ないけれど、必ずやってしまう。この実行力に驚きました。

都市部でどんなに講釈をいっても、パソコンを使っても、この実行力はない。寡黙だけれど実現させる力、技があることに、私は「本当のむらおこしというのはこういうことなんだ」と思いました。だからあの橋も架けられたんだ。だから水害にも負けなかった。だから新十津川村も作れた。という何か魂を感じて、こ

ここに来るのは私が学びに来ること、と思ったのです。いまや谷瀬の「ゆっくり散歩」に、多くの人が歩いてくださるようになり、移住者も増え、子どもの声も聞こえるようになりました。

増田：

続いて朝日新聞の現役で社説を書かれたり、全国をよく回っておられて、奈良県のご出身の坪井さん。「実は十津川村ははじめて」と伺いましたが、印象を含めて、十津川村で感じ取ったこと、あるいは全国の自治体を多く見ているなかでさらに気が付いたことなどを。



坪井：

奈良市に生まれまして、大台ヶ原には来ましたが十津川村は初めて来ました。今回参加するにあたって司馬遼太郎の本を読むとか、勉強してまいりましたが、来てやりたいということが三つありました。一つは「谷瀬の吊り橋」を渡る。もう一つは全国で初めて「源泉かけ流しを宣言」した温泉につかる。昨日それを果たしました。素晴らしい。三つめは「満天の星」を眺める。昨日、宿に露天風呂があったので、満天の星を仰ごうと、夜中一人で行ったのですが、曇っていて見えなかった。なので、また来る機会にそれを果たそうと次回に持ち越します。各地をそんなに真面目に回っているわけではなく、私に言わせると、十津川村は、この温泉と吊り橋と星。これでもう何もほしいものはないくらい、人々を引き付ける魅力がある所だなと実感した次第です。

自治をかじった経験からいうと、奈良県を私は評価しています。それは村がたくさん残っていることです。市町村合併で、全国にはもう村が一つもないという県がいくつもある。ここは全部で12ある。村という単位を大切にしている荒井知事の方針だったのであろうと思います。

こういったのはなぜかという、平成の市町村大合併で、合併したところとしなかったところ、というのが10年以上経ってどうなっているか。2年ほど前に日本弁護士会が調査をしたところ、合併したところ、しなかったところ、隣同士、人口、4000人くらいのところを比べると、合併したところの方が明らかに人口は減り、高齢化が進んでいるというデータが出たのです。それは要するに役場機能を失った、というのが大きかった。合併をしないでがんばっているということ、評価しているということを最初に申し上げておきます。

増田：

私、前回来た2月の時に夜中、星の数が多くて久しぶりに満天の星を見た覚えがあります。また次回是非ご覧いただければ。続きまして神野先生。神野先生は地方財政の大家でありますので、数多くの地域に足を運ばれて、多くの自治体の姿を見てきていらっしゃる方です。



神野：

大阪市立大学に勤務しておりました時に、「五新線」が幻になりました。100何億かけて、途中でやめると。その時に何回かお邪魔しました、というか、そのあとどうなるのだろうか。それ以来です、ご不幸な災害にあわれてからは初めてです。そうした意味では懐かしく思っています。

今日のご提案その他を見て、「村」を財政学的に定義すると、「生きている自然に働きかけて生活をしている」、村は「群れ」からですので、群れはつまり集合して集まっている地域のことを村と呼んでいる。そして「町」というのは、「死んでいる自然に働きかけて生活をする」、それと「人に働きかけて生活する」。第二次産業と第三次産業、と簡単にいってしまえばそういうことになります。それを町と呼んでいます。村と町の上に郡がある。したがって村というのは、自然に働きかけながら生活している人が、肌を寄せするようにして寄せ集まっている。それを村といいます。

もう少し村の構図を正式に言うと、村は働きかけるために住んでいる場所であって、働く場所のことは「野良」といいます。村、野良、山、この三つから構成されているのが村ですね。野良は野良仕事の野良ですので、働く場。その三層から成り立っている。山は里山であり、それから入相みみたいな役割を果たす場所も含めて山と呼んでいる。ただし「自然村」、私たち人間がそういう空間をつくってきたわけです。世界でも日本でも同じことです。この自然村の上に「行政村」行政の区画としての村をかさね書きしている。私はここを訪れた時に、その原型が残っていると思いました。

本日の「6つの提言」ここを見ていただくと、山で子育てしましょう、人のつながりを大事にしましょう。それから伝統と生きている自然を大事にしましょう。それから広いからいい、不便だからいい、とあります。これ重要なポイントで先ほど、基調講演のなかでもいっておられた。文明を拒否すると、文化が生まれる。

私は普段は山で生活をします。スウェーデンもそうやっている。スウェーデンではテレビを入れている家は失格です。あんなもの見るものではないので、テレ

びではなくて、自然に入ってその中で恵みに働きかけるという生活をして、普通の日に戻って、そのあとは山奥に入ってという生活をしている。それを見習って基本的には私は1200～1300メートルの山奥にいます。山はいろいろなものが豊かです。

私の豊かさの定義は何かというと、その人が欲しいもののうち、お金で買えるものが少ない人が豊かな人です。貧困のなかに二つあって、「所得貧困」と「人間貧困」。これはご存じの通り最近では社会的排除ということで、貧困を表すようになってきていますね。人間というのは人々の絆に護られている、いろいろな人がいつも助けにきてくれる、そういう状況がないことを人間貧困と呼んでいます。

今、世界的に異常な、根源的な危機に襲われていることは誰もが認識している。二つの破壊がおこなわれている。人間に必要な「自然環境」の破壊。もう一つ、人間に必要な「社会環境」の破壊です。環境というのは二つあるので、その象徴がSDGsですね。これは自己再生力の自然の再生力を破壊しないで、持続可能にすること。人間の社会、自己再生力があるので、これを破壊しないで持続可能にすること。この二つがSDGsのいっている持続可能の発展ということなので、それが実現されつつあるという風に感じております。

増田：

今、世界的にもコロナも影響しているのでしょうか、その前からいろいろな世界的な格差の問題、貧困の問題が指摘をされてきました。後半でお話になられたことはおそらくそれを、一方で正反対のことが、この十津川の地域でおこなわれている、営まれているということとの対比で、ご指摘をされたと理解をして



おります。自己再生力とか、今一番必要とされることにつながるものを、ここで感じられた、というお話だったのでは。

私も以前、岩手で知事をしておりました。いわゆる中山間と呼ばれる地域で営まれている生活、行政をどのように展開していけばいいのか、いつも自問自答し、悩みながら行っていました。奈良県では荒井知事さんが展開をしている「奈良モデル」というやり方があります。実は私もその様子を垣間見させていただき、そういう場に立ち合わせていただいたことがあります。知事さんと市町村長さんが定期的に、いろいろな情報交換をして、その信頼感の上に立ってそれぞれの行政分野について、ここまでやるのか、というくらいに県が市町村のサポートをしておいでです。

地元で県民の皆さん方がどのように感じ取っておられるかはわかりませんが、行政の分野では大変特筆すべきことです。そこまで県が市町村支援にまわっているというのは、ごくごく少数です。その意味で「奈良モデル」というのが、総務省の会合や資料にもでてきます。改めてではありますが、今日知事さんがおられるので、お聞かせいただければと思います。



荒井：

まずは皆さまが十津川に来ていただいて、うれしく光栄でございます。テーマが“「むら」に生きる”ということ。我々の立場からは、どのように村で生きようか、どのように十津川で生きようか、ということを考えよう、ということだと思います。考えるというのはフラットなことで、上から教えてやる、というのではなく。増田さんが「学びに来た」と、これはすごい言葉です。こちらも学ばしてください、これはフラットな関係ですね。

これは実は「奈良モデル」の原点です。国のいうことを聞け、知事のいうことを聞け、ということではなく「学びあおう」ということです。地域の課題がいろいろあるのを、悩み、希望を分かち合おうと、そのようなことをフラットに交流しようということ。今日は村の内と外との交流ですが、「教えてやるよ」という雰囲気では全然ないですよ。増田さんの言葉が象徴的で、「学びに来た」と。じゃあそこで、こちらが教えてやるよ、というようなことをいえる立場ではありませんので「私も学ばさせていただきます」という言葉でまずお返しして、学び合いたいと思います。

中村先生のお言葉が大変印象的でした。まず、森が大事だと。森はあふれるくらいにありますので、森が大事だといっていたのはありがたい。生物多様性というのもとても大事で、奈良県は「人と森の共生条例」というのを作りまし

た。生物多様性という目的を、四つの内の一つに入れました。今まで、森といったら林業で、とにかく生産をして早くいい杉を育てて儲けようとしてきました。そういう森だけを対象にしているのはダメだと否定したのです。だから今日の、森の生物多様性で“「むら」に生きる”を考えようというのが、まず第一に印象的でした。

二つ目は、時計の話。時計というのは生きるということと関係するように思います。時計に象徴される工業化。文明史だと狩猟、農業、牧畜、工業、デジタル化。中村先生のお話だと、デジタル化は工業化の延長ではなくて済むかもしれないと、ちょっと希望を持ちました。工業化では、効率化、省力化、思い通りになる、これは非個性ですよ。デジタル化のなかの個性というのは、どのようにするのか、ヒントをいただきました。

三つ目のことですが、利他心ですね。他人を知るということは、自分を知るとのこと。他人を知るというのが、新しい文化の原点かな、とインスピレーションがわきました。自分を知れば、他人に寛容になる、これを信じております。これからのデジタルになっても、多様な人が生きられるような村をつくるべきだ。

村のなかの多様性、村のなかでの生き方、それは子どもも年寄りも女性も、多様な村、寛容な村、生き生きと生きられるということですよと、おっしゃったような、メッセージとして受け取りました。

増田：

いつも十津川に来て思いますのは、昨日もよくよく聞くと、村から出て仕事をしてまた戻って、または他所から来て惚れ込んで居ついて、そうした多様な人たちと村民が上手く混じり合っていて暮らしている、暮らしを支えている印象が大変強い。村長さんいかがでしょう。



小山手：

十津川村は多様性の宝庫だと思っています。例えば食べ物一つとっても北の方では雑煮はみそ汁。一方南や特に西側では、すまし汁。同じ村で雑煮でさえも異なっている。また象徴的な言葉で、ある大字の人は役場の方へ行くことを「十津川へ行く」という。教育面でも、村外の北へ、南へそれぞれ向かう。そうありながらも全員が皆、十津川の典型であると思っている。いろんな地域にいろんな特色があるのですけれども、

皆さん全員が「十津川だ」という、その自負をなぜか持っている。それがここの強さだと思います。かくいう私も40年ぐらい経って戻ってきて、十津川の言葉を喋れないぐらいなのに、何か十津川の一つの典型じゃないかと自負している部分もあります。

「村」という言葉はややネガティブなイメージで、子どもの頃いわれたのは「もう少しで十津川村も町になれた。1万3000人位の人口の時に、もうひとがんばりで」と。北海道の新十津川町を「子どもの方が優秀で、あちらは町になった」と、町に対する引け目ですね。ですが、先ほどから村が残っているということ誇りにしようとか、多様性の強さとか、非常にポジティブな形で村を考えるというご指摘いただき、私もいままで『広辞苑』的な形での考えだったと密かに反省しています。

増田：

私、以前、北海道の顧問をやっていたので、新十津川町にもお伺いしたことがあります。明治のあのときに移った皆様方も、やっぱりこちらに対する想いは大変強いんですね。繋がっているんだと思いました。多様で55の集落それぞれの食べ物や踊り方も違う文化なのに、前の更谷村長さんから「水害のときには本当によくまとまって、その後の復旧で、一致団結してやれた」と聞きます。なぜまとまるのか。

小山手：

答えがなかなか見つからないのですが、私はやはり税だと思います。十津川村は太閤検地のときからずっと御赦免所でした。もちろんそれは朝廷に対する忠勤ともいわれていますが、実際には税より徴税費用の方が多分高かったためかもと。結果として近隣の地区との姻戚関係なども非常に薄く、十津川で関係が完結するケースも多いです。一歩超えると課税、こちらは非課税というところが背景にあったのではないかと思います。

増田：

歴史も踏まえ、十津川が生きていく上でいろんな工夫をしながら、強さを保っているということですね。県として南部地域に対しての思いが強くあり、市町村

合併という形で基礎自治体の力を強めるのではなくて、基礎自治体をそれぞれの行政単位を活かしながら、県がサポート支援をするという「奈良モデル」を展開していらっしゃる。村が数多く残っているということに繋がるんですが、どう政策をとられたのでしょうか？

荒井：

市町村の合併というのは、明治の始めに71,000あった村が、1,700になった。それで日本が良くなったか、地方が良くなったかというのが大きな問いです。地方の小さな村でも多様な地方がまと



まると、まとまりがなくて漂流してしまうのではないかと。増田さんがおっしゃった多様性はどのようにまとめるのかという問いはすごく大事だと思います。強制や同調しなさいという明治政府の教え込みは駄目だと思う。多様ななかでどうまとめるかは政治的なテクニックで我々の課題です。

「奈良モデル」はフラットで議論しましょう、何よりも対話議論が大事、知事と市町村長は同じ立場ですよ、と。そのときに話がまとまっていくのは、地域課題の共有化です。目標の共通化、課題の共通認識というのが絶対必要です。それが共通であればいろいろできます。「お金を一緒に使おうよ」「そのためには何をすべきか考えようよ」と。そのような気持ちのところには、中村先生のおっしゃった「利他」が集まってくる。お金のある人はお金をくれればいい、お金のない人は知恵をくれればいい、金も知恵もない人は体を動かしてくれればいい、あるいは励ましてくれるだけでもいい。

十津川は、十の水辺と谷という意味。私から見ると十津川の政治はなかなかまとまらない。選挙になると「向こうの澤や谷はこうだから、俺は反対だという人が多い」といつも村長さんの愚痴を聞いてきました。まとまらないのをまとめるのがチャレンジで、リスペクトしながらできると思います。上から抑えるパター

ンではなく、腹のなかをさらけ出して話し合うのが大事。例えば健康ならもっと健康になることを考えて、病院を一緒に作ろうとすれば実現できたわけですから。遅れているではなく素地があると考えて、奈良県南部は日本で一番健康になろう！と。目標の共有化から始まるのではないかと思っています。

増田：

坪井さん、先ほど平成の大合併を言いかけておられましたが。

坪井：

私は取材する側で見ていて、何のために合併するのが疑問でした。国にもお金がない、県にもない。行政にお金が回らない時代になって、もっと効率化していかないと行政が持たないと考えた人が国にいて、そうすると反対の声が大きいと進めら



れないので、少なくするには首長の数を減らせばいいと。半分悪意で見るとですが・・・。善意で考えると、国はこの国を続けていくために、お金がない時代にはお金がないなりの行政をしなくちゃいけない。そのためには、まとまってくださいねっていうことですね。

コンパクトにされる側からすると、役場の機能が失われただけで、地域の経済はどれだけ疲弊したか。すると若者はそこで稼げないと外に出てゆき高齢化が進む悪循環。合併で良い事があったか？全然無かったとはいわないけれど、過疎化はずっと続いています。昭和40年から過疎法を作って過疎の町を何とかしなくちゃいけないとお金を入れてきて、十津川の場合は橋ができて良かったですが、ただ過疎が止まらないのはなぜか。

皆さんはご記憶ないかもしれませんが、安倍総理大臣が「地方創生」と言ったとき、「東京の一極集中を5年で止める。東京への流入超過を5年たったら、出ていく人と入ってくる人の数を揃えます」って旗を振ったのですが、結局東京一極集中というのは止まらない。コロナで東京で働かなくてもいいってこと

がわかって、若干東京から出る人が前より増えましたが、この日本の国は一極集中が止まっていない。効率、効率といってくると、十津川のようにどんなに素晴らしい自然があっても、都市部から遠いことがハンディに感じてしまう。

地方創生でもう一つ言えるのは、「まち・ひと・しごと」の好循環をしていきたいと思いますということだったのですが、どうもやっていることは、仕事を作れ、仕事を作れ、稼げ、稼げと国はいつて。要するに稼げない地域は駄目な地域だといつて切り捨てていくみたいな風潮が止まってないと私は思っています。ですから今回十津川に来させていただいて、さっき村長さんが困るぐらいバラバラな、確かに55も字があったらきっとどうやってまとめるのかは私も理解できませんけども、そういう多様性のあるところっていうのは、逆に今後の生きのこることの芽があるんだろうと思っています。

一つ私が好きな村長さんが長野県にいまして、その村長さんがいつていたのは、「仕事をどう作るかつてのは、実は地域にはあるんだ。10人いたら10人が一緒に働けるんじゃないくて、10人いたら10人がそれぞれの仕事で働ける、生きていけるぐらいにするんだ。それが村作りだ」と。十津川はきっとそれを実践できる所だなと思いました。

増田：

今おっしゃった、稼げない地域の切り捨てについては、最近あちこちで「稼ぐ力」といわれるようになっていきます。経産省などのレポートを読むと、まさに企業は合理化して生産性を向上させろと。確かに稼ぐこと自体をストレートに聞かれると、否定するものはありませんが、私はそれ以前にやっぱり「生きる力」がしっかりと備わっていることが、稼ぐことに対しての知恵もいっぱい引き出してくると思う。神野先生は、スウェーデンで暮らされて、特に基礎自治体としてご覧になった場合、この十津川と共通点や違いをどんな風にご覧になりますか？

神野：

ある意味で共通していると思います。彼らの誇りは森の民。日本人は日当たりの良い所を好みますが、彼らは日当たりの悪いところも楽しんでいる。単に森と

ともに生きている。日本人に森を散歩しましょうと誘っても、ただ単にウロウロすることを楽しむのが解らないといわれます。

それからもう一つは、人間が生まれて育って死んでいく包括的な機能がまとまっているところが村。世界的に村は生きるための単位。そこで生きるための何かができなければ、逃げ出る人が多くなる。先ほどの合併の話でいうとスウェーデンも合併しました。自分たちだけではできないことが起きた時のメリットと、荒井知事のおっしゃった課題の共通認識で、合併した方が良いと判断して合併する場合があります。その場合、合併したとしても、それぞれの生活に必要なサービスはそれぞれの地域ごとに違うので、地区委員会を認めて、対人社会サービスはその地区ごとに出して生活様式に合わせます。地域自治組織で合併したとしてもやれるってことです。

増田：

神野先生が以前、別のところでおっしゃった事がすごく頭に残っています。対人サービスや社会福祉の様に生きざまとか価値観が問われるようなものは、合併で合わせてしまうと、大が小を飲み込んでしまう。全て東京と同じように、が勝つに決まっている。やっぱりそこに十津川の考え方や価値観を残しつつ、しかし一方で、合理化すべきところもあるとすればそこを合理化するっていうことが大事かと思います。

野口さんより順番に、十津川に対する思いや分科会での提言などを受けて更に提言など、一言ずつお願い致します。

野口：

生きるということを、このコロナの間に全国の人が考えてきました。生きることをちゃんと生きる、強く生きるのができるのはこういう地方の方々だと思います。分科会でこんな発言もありました。「お弁当に箸を忘れたときは箸を作ればいい」東京だと私達はもう食べられないです。無い物は作ればいいっていう話があり、強いなあと思いました。4～5歳で1000メートル級の山に平気で登る。親以外の大人たちと、地下足袋で登っちゃう、そういう山っ子がいる十津川村も強いですね。



そういう強さをおすそ分けしてもらおう観光だと思えます。オンラインで分科会に参加した都市部の方が、「十津川は自分を修行させてくれるところだ」とおっしゃいました。村民の方がそういう場なんだ、自分たちは強いんだぞっていうのをいつも意識していることがまず大事です。元気で強いというだけじゃなくて、例えば今日飾ってある「ムコダマシ」を大事にしてそれを食べ続けることや、干し芋などの文化を丁寧ずっと伝承していくこと、こういうのも強さなんですね。

十津川村は55の字がある。その一つずつが固有の文化、生活を大事にすると強くなります。それが集まって十津川郷という一つの緩いくくりになる。例えてみれば、ブドウの状態だと思えます。1粒1粒が味わい深く、すごくきちんと熟れた良いブドウの粒々が、房という形で繋がっているのが十津川郷です。大きいのが12の村々。天川村のゴロゴロ水、会場玄関に飾ってあった野迫川村の槇、会場に展示されている12村のポスターはどれも素晴らしいです。12の村々の個性、これも1粒1粒のブドウなんですね。村々が個性を大事に強く生きていく、それが南部東部、つまり奥大和という一つのくくりになって胸を張っていく。これは日本の将来をここから開拓できると私は思っています。東京は、外は立派で硬いけれど、なかはグズグズのスイカです。コロナで叩かれればすぐ潰れる。そうしたときに、粒粒がしっかりしてるブドウは強いと思えます。

今回の分科会に30～80代の方がご参加で、聞くと本当にご立派な考えをお持ちでした。せっかく集まっているいろんな発言をされたので、ぜひこの十津川村でスローライフ・プロジェクトを何か始めたいものです。みんなが提案して出したことを実現していきましょう。奥大和全体でも、今日をきっかけに。

坪井：

冒頭に吊り橋と温泉と星を楽しみにしてきたと申し上げましたが、実は昨日来て、もう一つすごいと思ったのはお酒です。谷瀬の日本酒も、ヤツガシラの焼酎も美味しかった。鹿児島県鹿屋市の「やねだん」は集落で焼酎を作って大売れました。地方創生大臣が見学に行ったりするぐらい有名になりました。その合言葉は「補助金に代わるものは何か、汗だ！」って、いい言葉だなと思います。私は十津川の皆さんも補助金に代わる汗を、たくさんかける方々だろうと期待しています。一点だけ追加すると、NPOの活動は全国で広がっていますが、ともすると行政の下請けになってしまう。そうならないように行政を逆にこき使うようなNPO活動をしてほしい。特にこういう地域だと、交通網、NPOが高齢者を運ぶのを法律的にできるようになってきているので、その辺も頑張っていたきたいと思います。

神野：

今コロナに襲われて都会はとんでもない現象が起きています。赤ちゃんはもう笑わなくなりました。マスクをしたままの顔しか見たことないので、それから子どもたちが人間の感覚がわからなくなっています。このままいけば、私達は人間が社会を形成して、手を繋ぎ合って生きていくのだっていう意欲も能力もなくなる。子どもたちが育てられなくなるのではないかという、危機意識が非常に強いんです。



十津川は最先端に立たなくてははいけない。つまり、今までは何かゴールはこっちだと思っていたのが、今逆方向にも展開しつつあって、世界的にも田園化、逆都市化と逆転現象が起こりつつある時期ですので、十津川の人たちは十津川のためだけではなく、人間の歴史のために、これが人間の社会のあり方なのだというモデルを示していただけないかと思います。

皆さんもご存知の通り、人間にどうしてこんな「禍」が増えたのかというと、ギリシャ神話の『パンドラの箱』で、パンドラが災いの詰まっている箱を開けて、ワーッと出てきて不幸な状態に今なっている。忘れてはならないことは、パンドラが慌てて蓋を閉めたときに一つだけ小さいものが残ったんです。それは希望です。まだ残っている希望の芽を持っている十津川なので、その希望を大きく膨らませていただきたいと思います。

中村：

具体的に二つだけ申し上げたいと思います。私、これからの社会は世界中で必要なものだけ作る社会にしたいなと思っています。要らないものは作らない。テレビドラマ『北の国から』で田中邦衛さんが演じた黒板五郎のセリフに私の好きな言葉があるんです。「必要だと思うものは何でも自分で作りゃいいんだよ。途中で面倒くさくなったらそれはいらぬものなんだよ」って、名言だと思います。多分ここの方たちが橋を作り、それから散歩道を作り、これは本当に要るものだったから、野口さんがびっくりするような実行力でお作りになったのだと思います。ここの方たちは多分本当にいるものをかなりご存知なのじゃないか。それをどんどんやってくださることが、これからの社会の一つのモデルになりそう



な気がして、期待しています。

二番目は森のことです。ここは96%が森で、放つといたら100%になりそうだと村長さんがおっし

やっていました。森と広い村と 55 の字と多様。なぜ多様なのかとおっしゃっていましたが、多分、人間より森の方が先にあったわけです。自然というのは、必ず多様なのです。森って一見一様だけど、実は森へ入ってきた人間との付き合い方で、そのときそのときで変わるから多様な文化がある。そこをこれから人類全体で森林との付き合い方を、熱帯林を壊さないなんていうのも含めて考えたい。とっても大事なことです。この村は今まで長い間、森林との付き合いを見事にやってきたことと、なぜ多様なのかを突き詰めて考えると、そこからすごい答えが出てくるのではないかと思います。

小山手：

森の問題。私はどうしても現状は、バランスを欠いていると思っています。森との付き合い方を、もう一度見直すタイミングが来ていると思います。

また、日頃からもっと村民にこの十津川に自信を持っていた

だきたいと思っています。今回パネラーの皆様方から十津川村の潜在力に評価や希望の尺度を提供していただいた。特に多様性を包含するのが十津川村の特徴で、広ければ広いほど課題も大きい。ただ、課題が大きければそれを克服したときの果実もやっぱり大きいと思っています。

今回いただいた提言を聞いて、村外の方々のコメントはその背景にもものすごい危機感がうかがえました。残されてる時間はそれほどないのではないか。時計を外す、とは全く反対の発言になってしまいますが、もう少しスピードアップがどうしても、今、必要ではないかと。今回は本当に心強く感じました。

荒井：

今日は多くのことを学ばせていただきましたが、増田さんが地域の価値観という言葉を使い「地域のアイデンティティ、十津川のアイデンティティを大事に



しろ」というお言葉だったと思います。私は「十津川精神」「十津川魂」は十分力強いものがあると思います。

その例として、いつも思い出すのは明治20年頃の大水害で人口の半分ぐらいが北海道に移住したときのこと。それが秋で、冬が越せるか心配になった初代知事の税所篤という立派な方が金一封を与えました。ところが、十津川村から北海道に行った人達はそのお金を使わなかった。自分で持っていたもので原野で冬を越して、そのお金を何に使ったかといいますと翌年小学校を作った。子どものための教育に使ったのです。これは十津川魂の誇るべき点だといつも思っています。

そのような魂がまだおありになるとと思いますが、魂だけでは食っていけない。生きる力は、稼ぐ力に直結しなきゃいけないし、我々知恵を出さなくてはと思います。稼ぐというのは働く場ということになりますので、森で働くか、森を利用して働くか。私はすぐにはいい知恵がないのですが、一つは、五條の方に緊急防災基地という名目で2000メートルの滑走路を作ることが、国の補助で認められてできます。十津川から車ならまっすぐ行くと20分ぐらい。防災の目的が主ですが、平時の空港をどう活用するか。その一つのアイディアで、森の恵みを世



界中に届けること。例えばオランダのチューリップはデジタルの注文で世界中に届く。森の恵みは何か、キノコやニホンミツバチの蜂蜜など、生産量は少ないけれども森の恵みは凄いよと、五條の空港からどこへでも届けるのも一つのアイデアかと思います。十津川のものだけ届けなくても、いいわけで。空港ビジネスというのがあって2000メートルってすごい力ですので、それも一つの稼ぐ力になるのではと思います。



増田：

どうもありがとうございました。それぞれのパネリストの皆さんからいろいろなご発言が出ました。私も最後に一つだけ。分科会の提言が6つ、どれもその通りで、今後実行されていけばいずれも素晴らしい

ことに繋がると思います。そういった提言をまとめる過程の議事録も拝見していましたら、地域の方が勉強のために島根県の隠岐海士町へ行ったと。大変有名なところで、前の村長さんが「地元にはないものはないんだ、だけどもあるものを生かしていく」ということです。町の魅力に惹きつけられる人がすごく多いところ。そこをご覧になった方がこんなことをおっしゃっています。「海士町に行って一番感じたのは、その町の魅力を村民の誰もが魅力を伝えられる。そのチーム力が凄かった」と。ですから私、十津川でも同じ言葉じゃなくてもいい、地元の良さ、地元に対しての愛のようなもので、皆さんがそれぞれの言葉で、村外の人に向かって伝えられるようなそういう地域であってほしいと思いました。

もう一つ、昨日お会いしましたフランスからこちらに来られた方がおっしゃっていたようですが、「自然は素晴らしいんだけど何かと結ぶ、健康と自然を結びつけるような…」と。私もある先輩に岩手で“健康院”みたいなのを作れないかと言われたことがあります。病院は地域の医療を守るためにいろいろご苦労しておいでですけども、病院は病を治すところでマイナスを元に戻すところ。

健康院はゼロをプラスにするような、そこへ行くともものすごく心身がリフレッシュして健康になるところ。村民の人たちはいつもそう暮らしているのでプラスもマイナスもないでしょうけども、私どものような村外の人間が十津川に行って、もっともっと元気になりたいとか、心身ともにリフレッシュしたいときに、温かく迎え入れてくれるような場所が日本の何処かにできないかなと。私はまさに十津川はその可能性をいっぱい持っていますし、分科会でもそういう発言がありました。やっぱりそういうところを感じ取っていらっしゃるのだと思いました。

つたないコーディネートでどう皆さんに響いたのかと思いますが、各パネリストの皆さんから大変含蓄のある言葉がいろいろ聞かれたのではないかと考えております。どうもありがとうございました。



⑥その他

会場の後ろには、奈良県南部東部の12の村のポスター、パンフレットなどが展示された。「奥大和」の村の魅力が一堂に集まった印象で、チラシなどを持ち帰る人も多かった。



3 おわりに

今回はコロナ禍での開催で、受付での体温測定、手指消毒をはじめ参加者の氏名・連絡先などの把握や、座る位置の記録など、感染対策に要する事柄に労することが多かった。しかし、無事に開催できて安堵することができた。

基調講演やシンポジウムで多くの提案があり、これを今後、奈良県及び奥大和で活かしていくことが大事だと考える。特に12の村の連携やスローライフをテーマにした新たな取り組みは期待できるものだろう。

十津川村では、分科会の内容が具体的で興味深く、そこから抽出された「6つの提言」は重みのあるものとなった。この提言を無にしないように、これからを考えていきたいものである。

スローライフ学会では、フォーラム終了後も多くの感想がメルマガなどに寄せられ、「十津川村を親戚のように思える」という人たちが育った。この繋がりを、奥大和に広げ、スローライフ繋がりの関係人口へ、または移住のきっかけへと活かせれば幸いだ。

スローライフ学会

4 資料

- ・案内チラシ：現地用、スローライフ学会用
- ・当日プログラム

東京都新宿区若葉1丁目6番1号ビジネスガーデン四ツ谷アネックス 204
特定非営利活動法人スローライフ・ジャパン

令和4年1月21日